

爺爺の俳句ごっこ入門（二）

河村正浩

結社の理念・師系

短歌や川柳に比べ俳句は結社が多い。結社には師系や主宰の俳句精神、理念のもとに方針が掲げられ、その方針のもとに会員が集まる。故に師系を重要視する人もいる。そして、そうした環境で切磋琢磨する。それを否定するものではないが、ともすれば閉鎖的になり、現代の若い世代にはなじまないのではないかと、う懸念がなきにしもあらずである。

俳句の読みにくさ

懸念と言えば他にもある。俳人は句に振り仮名を付けることや自句自解を嫌う。中には句はもとより文章にまで旧仮名や旧漢字を用いる方もあれば、「俳句を書く」と言われる御仁もいらっしゃる。どうも、結社および自身のテーゼのもと、俳句を文学として生真面目に考え過ぎているのではないか。最近、自註句集が出版されているが、それでも一般の人には読まれない。その原因の一つは、著者の視線があくまで「俳人」を読み手としているからではないか。

私の好きな俳人の一人でもある I さんの自註句集より二句とその自註をそのまま紹介したい。

したたりの一滴づつの物狂ひ

伝統俳句系の俳人は一瞥もしなかった句だが、現代俳句系の俳人は揃ってこの句を筆頭に取り上げた。

落書きのやうに瓢箪成りにけり

瓢箪という言葉の印象は、落書きへ容易に結びついてゆく。

いずれも、句も自註も難解だが、読み手としての対象が俳人であり、俳句の閉鎖性ゆえだろう。

ほとんどの国民は、芭蕉、一茶、蕪村及び子規の俳句を、一句くらいは口ずさむであろう。日本人にはそれだけ親しみのある俳句なのに、何故、現代の俳句は一般大衆に読まれないのか。何故、サラリーマン川柳のように楽しんでもらえないのか。それは句集や今の俳句が一般の人向きではないから。つまり、一般の人を读者として捉えていないからではないだろうか。

真面目と非真面目

では、俳句を気楽に楽しんでもらうにはどうすればいいのだろうか。森政弘の『「非まじめ」のすすめ』（講談社文庫）が、そのヒントになると思われる。内容を引用し以下に紹介させていただく。

私達の日常において、事柄がうまく運ばない原因の一つに真面目さの不足、つまり不真面目さにある。それは単なる不真面目というより、むしろ逆に低次元の真面目さによってもたらされているのではなかろうか。英会話の勉強を例にとってみよう。「真面目」は学校やテレビの英会話番組で、先生やテキストについてコツコツと学ぶ。「不真面目」は勉強しないでさぼる。「非真面目」は劇や歌、トリックなどで遊び、楽しみながら学ぶ。したがって、不真面目には止揚の姿勢がなく、逆も真なりといった発想がない。視野が狭く、大らかさが無く、頭が堅いということにもなる。一方、非真面目は不真面目を否定するのではなく、真面目も含んでいる。人間には真面目と不真面目、愛と憎しみ、善と悪のように対立する概念が多いが、非真面目には対立するものは何もない。